

葬儀の簡素化とともに、故人をしのぶ法事もまとめて済ます動きが広がっている。過疎化に悩む地方ではお寺が東京に出張して法要を始めた。一方で、寺離れが進む本土から沖繩に「出稼ぎ」に行く僧侶が増える現象も起きている。年間130万人の人が亡くなる多死社会。弔いの形がお寺から個人中心に多様化する中で、故人への思いも変わっていくのだろうか。

## 130万人のピリオド

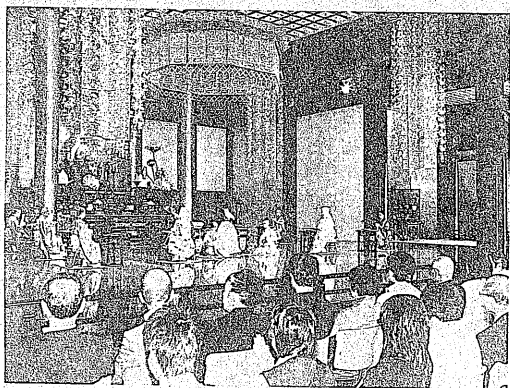
島根県西部の石見地域。世界遺産の石見銀山で知られるが、人口減少は止まらず過疎が最も深刻な地域だ。都会に出た人は高齢化しお盆に帰省する人も年々減っている。島根は寺院の数が多いため、檀家の減少は経営基盤を揺るがす。

細る縁をつなぎ留められたに考えたのが、お寺が出張する「東京法要」だった。浄土宗石見教区の教区長を務める極楽寺(浜田市)の住職、本田行敏さんは「この10年で年忌法要は三回忌までという人が増え、三三三回忌までやる家は半分以上になった。教区内で危機感を共有し、必要とされる場に自ら出向く」ということになった」と話す。東京法要は2007年から東京タワーに近い増上寺(港区)で始まった。石見

## 生活

# 法事簡素化 細る寺との縁

### 三回忌までが増加 ■ 繰り上げ法要も



島根県石見教区のお寺が開いた東京法要(東京都港区の増上寺)

## 地方の僧侶、上京でつなぎ留め

教区の約15寺の僧侶が毎年夏に上京し、東京や近郊に暮らす各寺の檀家に来てもらう。当初100人前後だった参加者は200人近くまで増えている。10回目16年には地元の伝統芸能「石見神楽」の舞台も企画。見学者も含めて約1000人が集まった。80歳を過ぎた津和野町出身のおばあさんが、東京で生まれた孫2人に支えられて参加する姿もある。本田さんがうれしかったのは「子や孫に供養の大切さを伝えたい」と参加理由を話す人が多かったことだ。ネット上には「檀家をやる方法」といったサイトがたぐさある。「寺離れ

わすか60寺と日本で最も寺院の数が少ない沖繩には檀家制度がない。独自の葬送文化を持つこの地で今、奇妙な現象が起きている。米軍普天間基地の近くにある宜野湾市の神宮寺。住職の金城良啓さんは「お寺



位牌の処分依頼も増加(沖繩県宜野湾市の神宮寺の納骨堂)

に属さないフリーのお坊さんが本土から続々と来ている」と話す。檀家からの安定した収入がない半面、僧侶1人当たりの人口が多いため葬儀・法要の依頼は多く自由に稼げる。そこで、本土で経営が苦しくなった寺の僧侶が「出稼ぎ」に来ているのだ。背景にあるのはやはり葬儀・法要の簡素化だ。沖繩では身内が亡くなった時、地元の新報に死亡広告を載せて広く知らせる慣習があるが、そのほとんどに「七七忌の儀は繰り上げ法要として初七日の〇日に四十九」と併せて執り行います」という文言がある。今や「9割以上の人が繰り上げ法要で済ますようになっただ」(金城さん)という。神宮寺の納骨堂には、継承者がなくなった遺骨や位牌(いはい)が所狭しと並んでいる。沖繩戦で下った

なった人の位牌をお炊き上げする人も増えている。金城さんは「かつては養子を取ってでも墓と位牌は継承していたが、処分する家が增えている」と話す。ユタと呼ばれる霊媒師が担った大規模な葬送はなくなり、葬儀社が仕切る例が主流に。それに伴いお坊さんの出番は増え、本土からも出張してくる構図だ。葬儀会社の公益社(豊見城市)で葬祭を担う大城重善さんは「核家族化で葬儀や法要の担い手がいない。家族の形が限界に来てい」と指摘する。「我々もニーズに合わせてお別れの様々な引き出しを提案していかないといけない」。金城さんは「江戸時代に確立された檀家制度以前の姿に本土は戻りつつあるのではないかと指摘する。個人中心の沖繩の葬送スタイルは日本の未来予想図かもしれない。故人と個人でつながる傾向は一層強まってきた」。

## 変化する葬送文化

法要はしなくても直ちに困るわけではない。合理性を追求しがちな社会でも、近々の普天間高校の吹奏楽部に境内を提供するなど地域に開かれたお寺を目指している。だが僧侶でもある作家の鶴岡秀徳さんは「寺が非合理性を切り捨てて檀家中心の合理主義にあくせらをかいてきた結果が、今起きている寺離れではないか」と指摘する。「個の葬送」が主流になるほど、故人の供養を豊かな生き方につなげる楽寺では檀家と関係なく音楽会や紙芝居を企画し

(大久保潤)